愛知教育大学研究報告，37（人文科学編），pp. 29 ～ 39，February，1988

ユイスマンス研究
—アレイ・プリンスへの手紙—

岩 渕 邦 子
Kuniko IWABUCHI
（外国語教室）

アレイ・プリンスは，1860年３月19日，ろうそくの製造及び販売を代々の家業とする家に生まれた。生家はオランダの Schiedam にあり，聖女 Lydwine の生地として有名なところである。[1] アレイ・プリンスは後に実業家となる。しかし彼は青年期に芽生えた文学への志も捨てることはなかった。

最初彼は，愛読するオランダの作家，Hildebrand の作品を手本にして創作に励むことから始めた。それは20才頃のことである。そのうちに彼は，自分の作品に批評と発表の場を願うようになった。彼は，当時18才の年若い文芸批評家，Lodewijk Van Deyssel (1864 –1952) に批評と発表の場の斡旋を乞い，これがきっかけとなり親しくつきあうようになった。

プリンスは，この Deyssel がよく勉強していて，フランス自然主義文学の理論と作品に非常に詳しいのに驚くと共に大いなる刺激を受けた。そして彼も又，同じ道をゆくことを決意したのであった。

1884年，プリンスは24才の時，オランダで最初の自然主義風な中篇小説，≪Een buitenkansje≫（「あるこぼれ幸」）を書いた。それは ≪Spectator≫ に発表される程の出来映えであった。但し，どの方面からも彼が期待していたような反応らしい反応は殆ど得られなかったのである。この経験からプリンスは，文学の新しい潮流に対して頑なに扉を閉ざしたままでいるオランダの出版界および一般読者の古くさい体質に今更のように気付き，大いに危惧の念を抱くに至ったようである。このためであろう，プリンスは翌年の1885年には，≪若き自然主義作家達≫と銘うったシリーズで矢継ぎ早にフランス自然主義文学の代表的な作品を紹介し始めたのである。オランダの出版界と読者に新風を吹き込むべきだと考えたに違いない。[2]

このとりくみの中でプリンスは，メダン・グループの一員として有名だったユイスマンスにも当然のことながら関心を寄せ，1881年の作品，≪En Ménage≫ をとりあげて論評し1885年８月16日付の ≪De Amsterdammer≫ に発表したのであった。[3] プリンスは出来上がった文芸週刊誌を早速ユイスマンスのもとに郵送した。これには，フランスの作家と連絡をつけたがっていたプリンスの気持がこめられていたのである。

一方，ユイスマンスにもオランダ人の血が流れている。1856年，父 Godfried は，ユイスマンスが８才の時，41才の若さでなくなってしまったが，彼は青年期に故郷であるオランダの Bredaから単身パリに移り，石版画及び細密画の職人として暮すようになった。そして

音楽を得意とする小学校教師のフランス娘，Elisabeth-Malvina-Badinと結婚したのである。従って，ユイスマンスの父方の親戚はオランダに在住していたわけである。ユイスマンス自身はパリ生れのパリ育ちで，オランダ語は殆ど理解できないのであった。

さて，プリンスの行ったユイスマンスへの働きかけは見事に成功した。それは，ユイスマンスから好意のこもった第一信がプリンスのもとに届いたからである。若かったプリンスは，自分よりちょうどひとまわり年長であり，作家としての力量も充分なユイスマンスが示してくれたこの反応に狂喜した。そして大いに勇気づけられて早速返事を書いたのであろうが，どうやらプリンスはその時オランダ語を使用したらしい。ユイスマンスの第二信（LETTRE 2）に次の様に書かれていることがそれを物語っている。

Hélas! mais je ne comprends pas le hollandais. Dans ma très tendre enfance, je l'ai un tout petit peu parlé, mais aujourd'hui, j'en ignore les premières syllabes. Inprimé, je me guide encore, çà et là, et finis à comprendre un sens général, mais écrit en lettre, je ne saisis plus que certains mots. Ecrivez-moi donc en français.

なおこの点に関して付記すれば，ユイスマンスの死の一年後 Herman ROBBERS がプリンスに対して行なったインタヴィューの記事が明らかにしているように、プリンスは独特の名前からユイスマンスは当然オランダ語を解するものと思い込んでいたとのことである。[4)]

さて，先に引用した LETTRE 2 の文面から，ユイスマンスのオランダ語の理解が生半可なものであることは明らかである。これに関連してルイ・ジレがとりあげている次の挿話は興味深い。すなわち，ユイスマンスは1874年，処女詩集 ≪Le Drageoir à épices≫を出すにあたって自分のフランス名をオランダ風に改めようと試みた。その時，Georges を Joris としたのはいいとして，Charles を正しくは Karel とすべきところをドイツ風の Karl としてしまったというのである。

ユイスマンスはオランダから寄せられたプリンスの便りを非常に喜んだ。それはまず最初に父祖の地に寄せる思いを快よく刺激したのである。プリンスからの手紙の消印がSchiedam となっていることに気付いてユイスマンスは，1876年８月に処女小説 ≪Marthe, histoire d'une fille≫ の印刷を引き受けてくれる業者を求めてブリュッセルに行ったこと，そしてひきつづき９月にはオランダの Tilburg に住む淑父，Constant Huysmans をたずねてゆき，その時 Schiedam の町も通りすがりに見たことなどをなつかしく思い出すのであった。[5)] ユイスマンスの決して豊富とはいえないオランダ体験の全ては，この点に関するプリンスの質問に答えて書かれた LETTRE 3 に見られる通りである。

J'y ai passé des années, enfant, à Breda—puis en 1876—j'ai passé 2 mois à Tilburg, La Haye, Amsterdam, Haarlem, Utrecht. Je suis depuis retourné 5 ou 6 fois à Tilburg où j'avais un brave homme d'oncle, professeur de dessin à l'académie de cette morne ville—

ところでユイスマンスの，オランダに住む父方の親戚は揃って信心深いカトリック教徒達であり，彼等は自然主義文学だの，ましてや世紀末芸術などについて共に語りあえるような人々ではなかった。従って，彼等を通してユイスマンスが関心を持つようなオランダの文学や芸術状況にふれるなど全く不可能なことであった。これは1885年前後のことであ

るが，彼等は，死期を迎え遺産問題を考慮していたユイスマンスの叔父の Constant に，彼の甥に当たるユイスマンスについて，その不道徳性を暴きたてる様々な良からぬ噂を吹き込み，ユイスマンスの遺産相続の権利を事実上剥奪してしまおうとする，悪意むきだしの行為に出るようなことさえしたのであった。[6] それは，彼等が常々，小説家などというものを胡散臭く思い，ユイスマンスに反感を抱いていたためであると思われる。従って，当時オランダの文芸紙誌上で，フランス自然主義文学の紹介のために文芸批評を盛んに書いていた若いプリンスの方から接触を求めてきたことは，ユイスマンスにとって大いに歓迎すべきことだったのである。

若いのになかなか意欲的なプリンスの活躍ぶりについては，実はユイスマンスは事前に親友の Robert Caze から聞き及んでいたのであった。それは，プリンスが≪若き自然主義作家達≫と銘うった文芸批評シリーズの第二弾に Caze の作品をとりあげるなどして，ユイスマンスより先に Caze と連絡をとりあう仲になっていたからであった。

プリンスはユイスマンスにとって，単に父祖の地，オランダに寄せるノスタルジーめいた気持からだけでなく，文学的な意味でも大いに交流したい気持を起させる青年だったわけである。それゆえユイスマンスはプリンスとの末永い文通を積極的に希望して LETTRE 1 を次のようにしめくくったのであった。

Quand vous m'écrirez, dites-moi donc vos projets littéraires et parlez-moi donc de l'attitude de la hollande que j'aime fort. Ici, nous n'avons aucun renseignement et les lettres de parents que je reçois sont absolument muettes à ce sujet. Ce faisant, vous ferez vraiment plaisir à votre dévoué...

以上のようにして始まったプリンス，ユイスマンス間の文通は，先細りを免れ得なかったとはいえ，1907年にユイスマンスの病死によって終止符が打たれるまで続き，ユイスマンがプリンス宛てに書いた手紙は総数237通に及んだのである。他方，プリンスがユイスマンスに出した手紙は，ユイスマンスの遺言執行人である Lucien Descaves がプリンス夫人に保証した通りであるとするなら，ユイスマンスの死の直前に処分されたのである。プリンス夫人は良人のユイスマンス宛ての手紙がもし公開されるようなことがあった場合，家門の名誉が汚される醜聞の種になるのではないかとおそれていたという。Descaves はその点に関してプリンス夫人を安心させたのであるが，彼の保証には疑問の余地があるという。それは，プリンスの手紙のコピーが3通発見され，現存しているからである。[7]

さて，ユイスマンスの手紙は現在，ゴンクール宛てのもの，ゾラ宛てのもの，ジュール・デストレ宛てのもの等が刊行されているのであるが，前二者は，ユイスマンスの側に様々に屈折した思いがありながら，先輩作家への敬愛の姿勢を崩すまいとする配慮は片時も忘れずに書かれているため，ユイスマンスの本心は到底うかがえないものとなっている。又，ベルギーの若い友人，ジュール・デストレ宛てのものは，プリンスへの手紙同様，ユイスマンスの率直な気持を知る上で貴重な資料となり得るものであるが，1891年の ≪Là-bas≫ の刊行時，今や革新的な政党の闘士として成長をとげたデストレが，ユイスマンスの作風や小説内容に理解と共感を示さなくなり，実質的にはこの年をもって両者間の文通は途絶えてしまったのであった。[8] 従って，1885年に始まり，ユイスマンスの生涯の終わりまで続くプリンス宛ての手紙は，≪さかしま≫以降の最も興味深い時期を完全にカヴァー

しており，ユイスマンスの本音にふれ，彼の実像に迫ろうとする時，非常に貴重な資料的価値を帯びてくるのである。

ところが残念なことに，Robert Baldick は，オランダに保管されていたプリンス宛てのユイスマンスの手紙を実際に調べ得る機会を有していた研究協力者，Mme Cornélie Kruise が伝えてきた，「これらの資料は，ユイスマンスの生涯及び人物について新しい情報は何ももたらしません」という言葉を過信してしまったようである。このため Baldick のゆき届いた著述，≪La vie de J.K. HUYSMANS≫ が部分的に不正確になってしまったことは否定できない。ここではその一例として，Robert Caze に関する一節をとりあげ，その記述中の不正確な点を指摘し，ついでユイスマンスのプリンス宛ての手紙，及び当該手紙の編者，Louis Gillet の研究成果を参考にしてそれの訂正を試みてみよう。

Baldick の著作中の問題の箇所を含む文は以下の通りである。[9)]

Huysmans écrivit aussi à Goncourt qu'il avait reçu une lettre d'un romancier hollandais lequel, quoiqu'il ne connût pas Caze, proposait d'adresser au blessé un chéque dont celui-ci désignerait lui-même le montant. Ce généreux Hollandais nommé Arij Prins était un écrivain disposant d'une fortune personnelle considérable, qui avait récemment quitté sa ville natale de Schiedam pour s'établir à Hambourg. Il admirait profondément l'œuvre de Huysmans qu'il avait fait connaître au public hollandais par un certain nombre d'importants articles parus De Amsterdammer et De Nieuwe Gids.

ここには Robert Caze への言及がみられる。Robert Caze (1853–1886) はゴンクールとユイスマンスの共通の友人である。彼はかつてはパリ・コミューンに関わった経歴を有し，小説も詩も書いたジャーナリストであった。又，作家や画家の集うサロンを主催し，ユイスマンスはそのサロンの常連であったという。

ところで上記の引用文には，Caze があるもめごとから，同業のジャーナリスト，Charles Vignier なる人物とサーベルによる決闘を行ない，その時，腹部にこうむった傷が悪化し2人の幼児と肺結核に冒されている妻に心を残しつつこの世を去っていった彼の死の前後，ユイスマンスの手紙によって事情を知ったプリンスが申し出た金銭的援助のことがふれられている。

引用文に明らかなように，Baldick の記述に従う限り，「プリンスは Caze を知らない」のに，サーベルによる決闘で重傷を負った人物，つまり Caze 本人に対して金銭的援助を申し出たことになる。果して事実はどうだったのであろうか。Caze の負傷から死に至るまでの経過，及びプリンスの金銭的援助がいつ誰に対してなされたのかについて正しい情報を与えてくれるのは，ユイスマンスがプリンスに書き送った手紙をおいては他にないのである。ここで事件の経過を辿りたいのであるが，これに関連する手紙の引用は，部分的とはいえ LETTRE 6 から LETTRE 14まで9通にも及ぶ。従って本稿全体の構成上の配慮から，その作業を注の方にまわすことにする。注10の御参照を乞う次第である。

なお，この時のふるまいから，文通相手，プリンスの暖かい人柄を知って感激したユイスマンスは，以後プリンスに全幅の信頼を置くようになったのであった。思えば，プリンス，ユイスマンス間の文通のごく初期に起ったこの Caze の決闘事件は，お互いの理解と信頼感を増す上で大いなるプラスの働きをし，永く続く文通の基礎がために貢献すること

になったわけである。

先に少しふれたが，Baldick は，プリンスと Caze を接触のない者同士として述べている。この点についてはどうであろうか。

結論から言えば，プリンスは面識こそなかったかもしれないが，Caze のことをよく知っていたのである。当該手紙の編者，Louis Gillet の詳細な解説によりそれは明らかである。彼によれば，プリンスが A. Cooplandt のペンネームで，≪若き自然主義作家達≫の総タイトルのもとに，シリーズで文芸批評を試みた時，L. Desprez に次いで二番目にとりあげたのが Caze の1884年の作品，≪L'élève Gendrevin≫ だったのである。これは1885年3月15日の ≪De Amsterdammer≫ に発表された。しかもプリンスが Caze の作品をとりあげたのはその一度だけでなく再三にわたっており，Caze が決闘で負傷して間もない1886年2月28日にも彼の中編小説集，≪Dans l'intimité≫ の論評を発表している。そういう経緯があったればこそ，プリンスは Caze の不幸に同情し，残された家族に援助の手をさしのべる気になったのであろう。更に，プリンスと Caze の親密さを証明するのは，二人がかなり頻繁に手紙をとりかわしていたことである。実際，La Haye にある Le Musée et Centre de documentation de la littérature néerlandaise には，Caze がプリンスに宛てた12通の手紙が保管されているのである。そのうちの，1885年4月22日付の最初の手紙からは，プリンスが Caze に，前述した3月15日付の記事を郵送していたことが了解される。ついでながら，12通目の手紙は，1886年4月17日の日付を付し，Caze 夫人の手になるものである。そしてそれは，良人，Robertの死に際しプリンスから示された厚意に感謝する主旨のものであるという。

このように，面識こそなかったかもしれないが，プリンスは Caze をよく知っており，ユイスマンスとプリンスの文通においては，Caze は常に両者の共通の友人として扱われている。又，意識の古いオランダ読書界に，フランスの最先端の文学を紹介するにあたって，プリンスが二番目にとりあげた Caze の作品，≪L'élève Gendrevin≫ がユイスマンスに献じられていたことを思えば，プリンスがユイスマンスの作品を論評する気になったのは，Caze がとりもつ縁であったとさえいえるのである。

次に，先の引用文の後半部分にみられるように Baldick は，「プリンスはユイスマンスの小説を高く評価し，一連の記事により彼をオランダの読者に紹介した」と述べているのであるが，これはともすると，プリンスがフランスの作家の中でユイスマンスにだけ興味を集中させていたように解釈されかねない述べ方である。しかし，やがては文通によって堅く結ばれることになるユイスマンスとプリンスであるが，はじめはプリンスにとってユイスマンスは複数のフランス自然主義作家の中の一人でしかなかったことを忘れてはならないであろう。

事実，オランダの紙誌にフランス文学に関連したことを何か書くたびに，そこでとりあげた作家にその記事を郵送するというのは，フランス人作家との間に何とかしてパイプをつくろうと意識的に努力していたプリンスが，どのフランスの作家に対しても等しく実行していたことであり，それは Caze の場合を想起してもそうであったし，ゴンクールへの働きかけをみてもその事情ははっきりするであろう。[11)]

しかしプリンスのそうした努力が功を奏して，プリンスとフランスの作家との間に親しい関係がとり結ばれたか否かということになると，当然のことながら，プリンスの期待に

反して，型通りの礼状が送られてくるだけという場合が殆どであった。プリンスとユイスマンスの間に親しい関係が生じたのは，Cazeの場合と共にやはりまれなことだったのであり，それ故にこそプリンスの喜びも大きかったのである。

プリンスとユイスマンスの間の親しい手紙のやりとりが，ユイスマンスの病死によって打ち切られるまで続いたことについては色々な理由が考えられるが，最大のものは，ユイスマンスが自分の中に流れるオランダ人の血を誇りとしていたこと，そして，親しくつきあっていた叔父，Constantなきあとは，事実上，プリンスとの文通がオランダとの唯一の接点となってしまったため，これをこよなく大切なものとして大事にする気持が働き続けたためであろうと推察される。

プリンスは，ユイスマンスの誘いに応じてたびたびパリにやってくるなど，ユイスマンスと親しむ一方，彼を文学の師として仰ぎ，ユイスマンスがゾラ離れを公然とうちだすにつれて，自らも同じ傾向を示し，中世や夢の領域に関心を深めていった。

他方，プリンスとの文通によってユイスマンスがつかんだものも決して小さくはなかった。何故なら，プリンスから発せられる，文学に関する熱心な質問に誠実に答えようと努力する中で，ユイスマンスは過去をふり返り，それにつれて反省を迫られ，過去のもろもろの営みの総括が必然的に進んだからである。LETTRE 7 はそうした事情をよく物語っている好個の例である。[12)]

LETTRE 7 にみられるように，ユイスマンスは文学流派の虚妄性に思いを至している。LETTRE 7 を解釈すれば下記のようになるであろう。

…流派の旗印に忠誠を誓っても空しい。現に，自分が本当にその作品の真価を愛で，人間的な共感を感じる人々は他の流派に分類されている有様だ。これまで有力なメンバーとして自然主義文学推進運動に関わってきたのだが，ゾラと自分自身とのこの共通点のなさはどうだ?!　彼は物質主義者である。そして今という時代を心から愛している。私にはこの時代が，社会が，厭わしくてならないのに。画家として互いに正反対の画風を示すと思われるラファエリの絵にも，ルドンの絵にも同じくらい強く惹かれる自分，つまり現実に立脚する芸術を良しとしながら，自分は夢の領分をとりこむ芸術も捨て難いのだ…

この LETTRE 7 の段階ではユイスマンスのゾラへの反感はまだ露わになっていない。唯，ゾラに対した時の共感の欠如に当惑している。ちなみに，ゾラへの嫌悪感が露骨に語られ始めるのは LETTRE 32以降である。

プリンス，ユイスマンス間の交流の文学上の最大の収獲としては，二人で行ったドイツ旅行があげられる。これも，仕事の関係でプリンスがハンブルグに腰を落ち着けていたればこそ，常に何かと健康状態がすぐれず，更にその上にきわめて腰の重いユイスマンスがドイツ旅行に出かける気になったのであった。

プリンスと共にドイツの各都市を巡るなかでユイスマンスは Cassel にもゆき，そこで Matthias Grünewald [13)] 磔刑図と衝撃的な出会いを果したのであった。この磔刑図との出会いがあったからこそ，ユイスマンスは，ゾラ流の自然主義文学への不毛かと思われた反発を有意味なものへと転換することができたのであり，その後のユイスマンスの人生上，文学上の方向が見出せたのであった。

最後に，LETTRE 7の冒頭部分が明かしているように，ユイスマンスに文学者としての自覚をうながし，更に，常に心のよりどころとして彼を支え続けていたのは，実は彼がルーヴル美術館で遭遇したオランダ派の絵画であった。ユイスマンスとオランダのつながりの深さが再認識される所以である。

（昭和62年9月16日受理）

注

1) 後にユイスマンスはこの地に取材し，≪Sainte Lydwine de Schiedam≫と題する聖女伝を書くことになる。

2) プリンスと同じ考えを持ち，同様の試みをしていたのは，Fr. Netscher, L. van Deyssel等であった。

3) Huysmans (J.-K.), *Lettres Inédites à Arij Prins,* publiées et annotées par Louis Gillet, Collection Textes Littéraires Français, 244, Genève, Librairie Droz, 1977, p.23.

4) *BULLETIN DE LA SOCIÉTÉ J.-K. HUYSMANS* N° 38, Aux Editions du Divan, 1959, p.421.

5) Je vois sur le timbre de la poste: Schiedam. J'y ai passé, en allant à La Haye, de doux moments et ai encore devant les yeux la gaieté des moulins battant de l'aile, dans ces beaux ciels nuagés de roux qui sont bien spéciaux à la Nederland. Ça me réveille un tas de souvenirs enfouis. C'est donc une vraie charité de nostalgie que vous ferez, en ecrivant et en me causant du pays.

（LETTRE 2より）

6) ユイスマンスの，障害の多い遺産相続については，下記のようにブロワがモンシャルへの手紙で伝えたことが参考になる。

Bloy l'explique, dans une lettre à Montchal: ≪Le vieillard, travaillé de longue main par des collatéraux millionnaires a pris de telles dispositions que la somme léguée ne peut être perçue par Huysmans qu'après la mort de six personnes qui en auront l'usufruit, sans que l'héritier puisse obtenir un centime≫.

Les parents en question avaient sans doute monté Constant contre son neveu qu'ils avaient dû lui représenter sous les traits d'un prodigue et d'un débauché. Ils ne pouvaient savoir qu'il avait jadis préfacé le Gamiani de Musset au nez et à la barbe de l'oncle Constant, mais ils avaient réuni d'autres ≪preuves≫ tout aussi convaincantes de son immoralité—et notamment un article dans lequel Félicien Champsaur insinuait que l'auteur des Sœurs Vatard était en un peu trop bons termes avec les ouvrières de son atelier. Ces machinations eurent pour résultat de faire pratiquement déshériter Huysmans par le seul membre de sa famille paternelle dont il n'eût jamais mis en doute la fidélité et l'affection.

(Robert Baldick, *La vie de J.-K. Huysmans,* Denoël, 1975, p.127).

なお，ユイスマンスは，叔父の死後二年目の1886年6月に，プリンスの尽力のおかげで言葉の障壁をのりこえ，複雑な法律的手続を完了することができたため，結局無事に叔父の遺産を相続することができたのであった。このことでユイスマンスのプリンスによせる信頼感と親密感は不動のものとなった。又，叔父からの遺産相続によって経済的なゆとりが生じたため，ユイスマンスはプリンスと共にかなり長期にわたるドイツ旅行を実行する気になったのであった。

7) Les lettres d'Arij Prins à J.-K. Huysmans n'ont pu être retrouvées à ce jour. Ont-elles été détruites juste avant la mort du destinataire, comme l'avait assuré Lucien Descaves à Madame Nelly Prins-Goudkade qui s'était inquiétée du sort des lettres de son mari? Ce n'est pas sûr, car dans la collection Pierre Lambert, déposée à la Bibliothèque de l'Arsenal à Paris, figurent trois copies de lettres d'Arij Prins à J.-K. H., datées resp. du 18 juin 1891, du 30 avril 1898 et du 9 juillet 1899. Seules ces trois lettres-là furent-elles conservées? Ou bien, Pierre Lambert, ou quelqu'un d'autre, copia-t-il uniquement ces trois lettres, parmi la série complète ou quasi complète?

（注3の出典に同じ）

8) Huysmans (J.-K.), *Lettres inédites à Jules Destrée, Avant-propos d'Albert Guislain, Introduction* et notes de Gustave Vanwelkenhuyzen, Collection Textes Littéraires Français, 130, Genève, Librairie Droz, 1967.

9) Robert Baldick, *La vie de J.-K. Huysmans,* Denoël, 1975, p.128.

10) この間の経過を示す手紙は下記の通りである。

...Caze a été bléssé en duel—pour une niaiserie—et il est actuellement au lit avec un coup d'épée dans le flanc. Il n'y a pas heureusement danger de mort, et j'espère qu'il sera prochainement sur pied, mais en attendant, le pauvre et bon garçon sourffre beaucoup. J'en sors tout attristé. ...

(LETTRE 6　24 févr. '86)

...Quant à notre pauvre Caze, il est, à l'heure actuelle, au plus mal—presque perdu—mort peutêtre pendant que j'écris. Hier les médecins ont tenté une opération qui n'a pas abouti; le pauvre garçon! et sa femme est poitrinaire et il a 2 petits enfants!

Quelle folie il a inutilement commise! et cela par vanité puérile. Je suis littéralement navré par cette histoire, ce qui vous explique le peu de gaieté que dégage cette lettre. ...

(LETTRE 7　mars '86)

Je sors de chez Caze—Toujours le même état—le médecin considère le cas comme désespére—il me l'a dit—Pauvre, pauvre garçon!—tout cela me horriblement et, moi aussi, m'empêche absolument de travailler.

Caze a eu, hier, un peu de lucidité dans sa fièvre—et il lui en était resté encore assez aujourd'hui, pour se sentir perdu.

Quant à la question d'argent, merci mon cher confrére, au nom de Madame Caze, à qui j'ai transmis vos offres. Pour l'instant, la famille et l'éditeur fournissent de l'argent—cela durera-t-il je ne le sais, mais enfin pour l'instant Madame Caze peut s'en passer. Elle m'a bien chargé de vous remercier de tout cœur, de votre offre si amicale et si dévouée.

Mon Dieu! les pauvres gens!

Goncourt était venu avec moi chez eux—Caze a reconnu nos voix dans une autre pièce et a voulu absolument nous voir. C'a été lamentable! il nous a parlé de son livre qui vient de paraître—puis l'égarement a repris et nous sommes sortis, accablés, plus que je ne puis vous dire.

Comme vous voyez, mon cher Prins, ma lettre est peu gaie, mais hélas! je n'ai pas le cœur à me réjouir, car Caze était un vieil ami à moi. C'était dans le monde des lettres que j'ai en horreur, un des seuls vrais camarades que j'avais—et personne, ici, ne le remplacera. ...

(LETTRE 8　24 mars '86)

Notre pauvre Caze est mort, hier, dimanche, matin, à 6 heures. Mes craintes se sont malheureusement réalisées.

Je suis malade avec cela de chagrin—atteint en même temps par la mort d'un oncle mort juste en même temps que mon cher Caze, de sorte que, mardi, jour de l'enterrement des 2, je ne pourrai même suivre le corps de mon vieil ami! ...　(LETTRE 9　29 mars '86)

...Je sors de chez la femme de Caze et voici ce qu'elle a fini, en pleurant, par me dire:

La mère de Caze a donné, en tout, pendant et depuis la maladie loo frs. Cette âme ignoble a, paraîtil, près de 20 000 frs. de rentes! quelle honte!—depuis la mort de son fils, elle n'a pas ouvert la bouche pour s'occuper de la situation de sa bru et de ses petits-enfants!

D'autre part, le frère qui est dans une belle situation commerciale, n'a pas reparu depuis la mort de Caze. Il a payé le pauvre enterrement, mais il ne semble plus s'occuper de la famille.

Ils sont jolis, dans cette lignée, décidément.

Mais ce n'est pas tout—Mme Caze a fini par m'avouer—ce dont je me doutais du reste, un peu—que le malheureux Caze avit, à son insu à elle, fait pour un millier de francs de dettes chez

des brocanteurs, libraires etc. Ces gens, depuis le décès, assiègent naturellement la maison et menacent de saisie.

Mme Caze n'ose avec cela avouer ces dettes à l'horrible vieille qui ne les pairait pas d'abord et ensuite accablerait d'injures la mémoire de son fils.

Dans ces conditions, avec Hennique et d'autres, nous allons nous démener pour tirer cette pauvre femme de là. Nous espérons une bourse d'interne puor le petit garçon et nous allons tenter de placer la petite. Nous allons subvenir aussi, au plus pressé, pour que cette malheureuse ne meure pas de faim.

Stock, l'éditeur, d'autre part, va tâcher de faire reproduire des romans pour procurer quelques sous à Mme Caze.

Mais nous avons besoin be tout le monde, hélas! vous, mon cher Prins, qui avez si bravement offert de l'argent à Mme Caze qui l'a refusé, par fierté bête, à ce moment—envoyez-lui—elle acceptera—je lui en parlé—et elle en a bien besoin!—faites ce que vous pouvez pour sortir cette malheureuse de ce pétrin de dettes criardes où elle se meut.

Quant à la mère, je vais consulter un homme d'affaires et si, dans la loi, il y a quelque article qui l'oblige—ce que je crois—à ne pas laisser mourir de faim ses enfants, je me charge de lui flanquer les croupières!—Il est vrai que Mme Caze qui tremble devant cette mégère, serait encore capable de ne pas oser l'actionner en justice. Je lui ai touché 2 mots de cela et elle m'a paru singulièrement effrayée à l'idée de lutter contre la vieille. ... (LETTRE 10 10 avril '86)

Je vous accuse sans retard réception du chèque de 250 [frs] qui va être touché aujourd'hui même et remis à Madame Caze qui vous remercie de tout cœur de la bonté que vous avez pour elle.

Je ne sais encore comment vont s'arranger ses affaires. D'une part, je me suis occupé de sa situation au point de vue du droit et j'ai acquis la conviction qu'il n'y a rien à faire. L'affreuse mère est presqu'invulnérable. Aux termes de la loi, elle ne doit rien à sa bru et n'est obligée qu'envers ses petitsenfants, et encore faudrait-il, pour la forcer à servir une pension alimentaire, lui intenter un procès long et coûteux. Tous mes espoirs s'envolent de ce côté-là!—c'est l'avis de jurisconsultes que j'ai visités à cet effet.

D'autre part, après une entente avec Stock, l'éditeur, je suis décidé avec les 1000 [francs] que j'espère récolter entre les amis du défunt, à ne pas payer les dettes de Caze. Ce serait trop bête!—que la famille les paie, si elle veut—mais nous, non; il faut que ces 1000 [francs] profitent absolument à la pauvre femme. Il serait trop dur de nous être tous saigné, pour payer des fournisseurs et voir, le lendemain, cette femme sans un sou. Tout cela est très difficile à arranger. Madame Caze ne l'entendant pas ainsi; elle ne veut pas avouer ces dettes à la famille qui, à mon avis, les sait et fait la sourde oreille, en nous laissant venir.

Voilà, mon cher ami, où en est la situation. Je ne sais trop encore comment la résoudre. Je vous tiendrai au courant de ce qui sera advenu. ... (LETTRE 11 14 avril '86)

...Les affaires de Madame Caze sont arrangées à l'heure qu'il est. Stock et Hennique sont allés en leur nom et au mien, voir le frère. On l'a avisé que si la famille ne subvenait pas à l'entretien de la femme, on ferait une souscription par la voie des journaux.

Enfin, le frère s'engage à faire 200 francs par mois à sa belle sœur; de plus, il va la loger auprès de lui, pour qu'elle ait tous les soins. Son sort est donc assuré, le Conseil de famille va s'assembler et, les membres déja vus, ratifient ces propositions.

Vous pouvez donc, mon cher ami, garder les 200 francs par an que vous avez proposés. Nous sommes assurés aujourd'hui que Madame Caze a de quoi vivre—et les enfants vont être boursiers. J'ai, de ma chambre où je suis toujours cloué, tendu pas mal de fils dans tous les sens pour obtenir ces résultats. ... (LETTRE 12 23 avril '86)

...Je suis allé voir Madame Caze, hier. Les affaires arrangées à Paris sont en bon ordre. Tout ce que je vous ai écrit à ce propos est confirmé. ... (LETTRE 13　21 mai '86)

...Quant à Madame Caze, elle est sauvée, comme je vous l'ai dit—Au reste, j'autrai bien des choses à vous dire à ce sujet que je ne puis mettre, car ce serait trop long—L'important, c'est que tout soit arrangé et que votre bonne et charitable promesse de l'aider annuellement soit sans objet, sans utilité directe. Gardez donc votre argent, mon cher ami. ... (LETTRE 14　29 mai '86)

LETTRE 6 にみられるように，ユイスマンスは当初，Case の決闘による負傷が命取りになる程重大なものであるとは全く思っていなかったのである。ところが Caze の容態は急速に悪化し，負傷の一ケ月後にははっきり死が予感される事態になる。(cf. LETTRE 8)

そして3月28日，Caze は亡き人となる。LETTRE 8 にみられるように，Robert Caze は，フランス文壇においてユイスマンスが唯一人心をゆるせる親友であった。Caze の死と時期を同じくして，ユイスマンスは母方の叔父の死にもあい，相次ぐ暗い出来事にユイスマンスはうちのめされる。

LETTRE 10 以降はにわかに現実的な問題が前面に出てくる。それは，Caze 夫人が経済的窮状をユイスマンスに泣いて訴えたからである。Caze の実家の人々は，母親をはじめ兄弟も嫁たる Caze 夫人を薄情にも見捨てる態度に出たのであった。とりわけ Caze の母親の未亡人に対する態度は冷く，法律上何の義務も求められていないのをよいことに，自分自身は潤沢な年金を享受しながら，一家の主を失って苦しんでいる嫁や孫に対して，金銭的なものも含め一切援助をしようとしなかったのであった。この間プリンスは，未亡人あての 250 フランの援助をユイスマンスの許に送り，ユイスマンスは仲介の労をとってそれを夫人に渡したりしている。

実は夫人は，当面の生活費に困るだけでなく，良人が残した多額の借金の返済にも追い詰められていたのである。このことを知ったユイスマンスは，Caze の作品の出版を引き受けていたストック書店などとも相談し，知人友人間で1000フランを集めその金の返済の肩代わりをしてやろうと考慮するが，結局，馬鹿馬鹿しくなってこの計画を放棄する。問題なのは，夫人が良人の実家に対して亡き良人の多額の借金の事実をひた隠しにしていることであった。ユイスマンスは，この件については，夫人がもう少し強くなって，Caze の実家と正面から交渉すべきなのだと考え直したのであった。臆病な夫人はいたずらに良人の実家の人々の仕打ちに怯えていたのである。

結局，この件は，ストック書店とエニック等が Caze の兄弟に直接会って意見したことで解決を見ることになった。Cazeの兄弟は諌められて今までの知らぬ振りを反省し，未亡人と二人の遺児の経済的世話を引き受けたのであった。こうした一連の事態の経過中も，ユイスマンスは身体の不調に苦しめられていた。病弱の身をおして，親友の為には面倒さをも厭わず親切を尽す彼の人柄がよくうかがわれるのである。もっともその後，おそらく Caze 夫人はユイスマンスの好意を当てにし過ぎたのであろう，下記の引用が示すように，LETTRE 14 が書かれて一年も経たないうちに，ユイスマンスの夫人に対する態度はひどく冷いものになってしまっている。

La femme de Caze est revenue de Suisse à Paris et me harcèle de lettres pour que j'aille la voir. Elle demeure, au diable, derrière la Bastille, et puis pourquoi faire ? qu'elle m'ennuie!

(LETTRE 29　7 février '87)

今は亡き親友の妻なればこそいろいろ親切にしてきたユイスマンスであった。それが夫人から当然視されてはかなわない。思い上がった夫人の節度を越えた依存ぶりを示され，彼の“女性嫌い”がその本性を現わしたというべきであろうか……ユイスマンスに冷たくあしらわれた哀れな夫人は翌月死亡した。(cf. LETTRE 3　10 mars '87)

11) Arij Prins, un écrivain hollandis, né à Schiedam en 1860, mort en 1922, qui s'enthousiasma pour le mouvement naturaliste français et qui contribua, pour une large part, à le faire connaître dans son pays, grâce à un grand nombre d'articles. C'est ainsi que, le 16 juillet 1885, il écrivait à E. de Goncourt, de Voorburg, près de La Haye: ≪Monsieur, Afin de ne pas laisser passer inaperçu en Hollande le 20 juin, j'ai consacré dans le Weekblad d'Amsterdam un article à M. Jules de Goncourt. —Vous recevrez le même courrier un exemplaire de ce journal.

(Huysmans (J.-K.), *Lettres inédites à Edmond de Goncourt,* publiées et annotées par Pierre Lambert, avec une introduction de Pierre Cogny, Paris, Nizet, 1956, p.99).

12) Hélas! je n'ai pas de bien intéressantes informations à vous donner sur ma genèse de romancier.

Il est pourtant un fait, c'est que j'ai appris à me connaître comme littérateur, au Louvre, devant les tableaux de l'école hollandaise. Il me semblait qu'il fallait faire cela à la plume. A cette époque, il n'était nullement question de naturalisme et d'autre drapeaux et quand j'écrivit Marthe, cela sembla si monstrueux—malgré la manifeste chasteté du livre—que le Gouvernement interdisit l'entrée de la pauvre fille, parue à Bruxelles, en france.

Je n'ai guère varié d'idées depuis, sauf toutefois une compréhension d'un réalisme avec dessous—d'une philosophie pessimiste se suivant dans tous mes livres, les étayant pour ainsi dire, d'une idée générale, ce qui diffère du naturalisme proprement strict, qui se borne à constater, sans conclusions à déduire.

Au fond, toutefois, je suis un peu revenu de tous les drapeaux. Il y a, dans n'importe quel genre, des gens qui ont du talent et d'autres qui n'en ont pas—tout est là—j'admire fort Barbey d'Aurevilly et Villiers de l'Isle Adam qui sont pourtant de forcenés romantiques, et je suis [de] leurs amis personnels.

Ajoutez à cela, une différence immense entre les idées de Zola par exemple et les miennes. Lui aime son temps qu'il célèbre—moi, je l'exècre—et pourtant nous arrivons à décrire les mêmes choses—lui est, en somme, à considérer la chose de près, matérialiste, moi pas—au fond, je suis pour l'art du rêve autant que pour l'art de la rélité; et si j'ai lancé Raffaëlli en peinture, j'en ai fait autant pour son antipode, Odilon Redon.

Tout cela n'est pas bien clair—mais il faudrait causer et non s'écrire pour expliquer tout cela—ou ce serait un travail d'esthétique de plusieurs tomes. (LETTRE 7 mars '86)

13) ユイスマンスがプリンスとドイツ旅行に出掛けたのは1888年のことであり，八月丸一月がこれに費やされた。二人が訪れたのは，Cologne, Hambourg, Lübeck, Berlin, Weimar, Erfurt, Gotha, Cassel の各都市であった。この最後に訪れた Cassel の美術館でユイスマンスは Grünewald の磔刑図 にめぐりあったわけである。この絵を見ることによって，彼の内に眠っていた信仰心が呼びさまされ，彼はキリスト教芸術の優れた一面をはっきりと認識できるようになった。後に訪れる回心の最初のきっかけはこの時もたらされたのである。

磔刑図から受けた強烈な印象と感動は，1891年に刊行された ≪Là-Bas≫ の第一章に定着され，ヨーロッパのみならず世界中の人々の関心をこの磔刑図に注目させるのに大きな力を発揮した。

現在，この磔刑図は，フランス東端，アルザス地方にあるオーラン県の県庁所在地，Colmar のウンターリンデン美術館で見ることができる。この磔刑図がこのウンターリンデン美術館に安置されるまでには，数々の戦火を避け，ずい分あちこちを経巡ったようである。

元来，この図は，活発な医療活動の伝統で有名な聖アントニウス会派に属する Issenheim の修道院が，16世紀初頭その豊かな富を背景に修道院の壮麗化をはかり，当代一の力量を有する画家に注文して描かせた祭壇画なのである。この祭壇画の製作者 Grünewald については，Mathis Nithardt（もしくは Neithart）といい，Mayence の大司教おかかえの身分で建築家でもあったこと，ルターに影響され，一時期は農民戦争に加担していたこと，その没年が1528年であること等の断片的事実が分るだけで，その詳しい生涯は到底知り得ない謎に包まれた画家なのである。それは，彼の死後，150年程が経過してやっと再認識され研究し始められた人物であるため，その生涯を再構成するための手がかりや資料が決定的に不足しているためである。